

“定年 28 号”愛知から東北へ (4)

中野 明

2012 年 5 月 9 日(水)、寒気を感じて目が覚めた。外は夜が明けて白みはじめていた。見覚えのない風景だ、ここはどこだ、一瞬混乱したが、ぼんやりした頭で記憶を探るうちに、昨夜気仙沼の復興屋台村の駐車場で寝てしまったことを思い出した。ことわりなく勝手にとめてばつが悪いので、すぐに駐車場を出て、前日に泊まった花の道パーキングに移動した。

コンビニのパンとコーヒーで朝食を済ませてから、気仙沼港近くにあるお魚市場に行った。被害を受けて閉鎖したまま立ち直れない店舗や施設が多いなか、ひとり活気づいていた。東北復興支援と思いつつ、気仙沼特産の魚やフカヒレスープなどを見繕って、家族や、カンパをくれた人たちに送った。

9 時ごろ、気仙沼を出発して陸前高田に向った。陸前高田ではまだボランティアを毎日やっているようなことを、気仙沼のボランティアセンターの人が言っていたし、有名な奇跡の一本松も見なかったからである。カーナビの目的地を陸前高田市役所に設定して走り出した。海岸線に沿って国道 45 号線を北上し、陸前高田市内に入り右に曲がって川を渡ると陸前高田の市街地が目飛び込んできた。えっ、思わず息を飲んだ。建物が無い、どこまでも建物が無くて見通せる。ところどころ、鉄筋コンクリートや鉄骨のビルの残骸は残っているが、はるかむこうまであったはずの一般住宅や商店の建物は消え基礎だけが残っている。今まで被災地をたくさん見てきたが、これだけの市街地の被害は初めてだ。震災当日の街全体を飲み込む津波の映像がまざまざと蘇り、改めて全身に寒気が走った。カーナビが案内してくれた市役所は鉄筋コンクリートの残骸と化し、すぐ隣では大型スーパーが鉄骨の骨組みだけをさらしていた。

どこかに新しい市役所があるはずだがカーナビには載っていない。とりあえず高台に行ってウロウロしていたら、プレハブの仮設庁舎が見つかった。そこで尋ねるとボランティアセンターは全く違う場所で、川に沿って 10km ほど山のほうへ行ったところだった。川に沿った道路に面してプレハブの事務所や倉庫がならび駐車スペースもかなりの広さがあった。事務局らしき人に声をかけるとすぐにボランティアの登録をしてくれた。活動は、月、火は休みでそれ以外は毎日やっていた。宿泊施設の案内が壁に貼ってあり、近くに有料の旅館もあったが、隣の住田町に無料の宿泊施設があった。車中泊のつもりでいたが、建物に止まれるならありがたい、そこに泊まることにした。川をさらに 20km 近く上ったところにある昔の小学校跡で、公民館として使っていたものを震災後に、住田町がボランティアの宿泊施設として提供しているもので「住田基地」と呼ばれていた。

事務局は昔の職員室で、寝泊りは講堂が充てられていた。あちこちに、荷物や寝袋が置かれていて、その日の宿泊者は 30 人ぐらいか。隅に無料の布団や毛布が積まれていた。敷布団と毛布を借り自分の寝袋で寝ることにした。料理は、講堂のとなりに調理教室があり、流しやコンロがいく

つもあって便利である。風呂もあれば洗濯機や乾燥機もあり、すべて無料で至れり尽くせりの施設でありがたい。しかし、消灯は早く 10 時だった。

5 月 10 日(木)、朝 7 時過ぎに住田基地を出てボランティアセンターに向かった。コンビニで朝食のサンドイッチとコーヒーを買い、昼食用におにぎりとお茶を買った。ボランティアセンターに着くとすでにたくさんの人がいた。いくつもグループがあり、静岡からは揃いの作業衣を着たお坊さんの集団も来ていた。

7 時 40 分から受付が始まった。その日の受付用紙に自分の名前を書きシールをもらう。シールにマジックで日付と自分の名前を書き、裏紙をはがして胸など見やすいところに貼る。8 時から朝礼が始まる。ボランティア代表の挨拶、安全のための注意事項、連絡事項の説明のあと、簡単な体操をする。朝礼が終わると団体は行先がすでに決まっているのですぐに出発する。個人参加者は 50 人ほどで、集められ活動の説明を受ける。その日は 3 つあり、順に活動の内容と募集人員の説明があった。最初は、港でがれき処理 10 名、やってもいいかなと思って手を挙げようかと思った時には、すでに 10 人以上が手を挙げていた。つぎは側溝の掃除 10 名、これも先を越された。私も含め残った人はみんなまとめて仮設住宅の畑作りの手伝いをするようになった。

活動の現地には各自で行くようだったが、よく分からない私は隣にいた K さんに載せてもらうことにした。作業で使うスコップやレーキも車に積み込み現地に向かった。ボランティアセンターから街の方へもどり、廃墟となった旧市街地を西から東へ通り抜けてさらに東に走り、岬の小高い山を登ったところにある元オートキャンプ場のモビリア仮設住宅である。仮設住宅の定番のかまぼこ長屋とは異なり、オートキャンプの区画ごとに一戸建ての仮設住宅が建てられていた。キャンプ場の事務所棟の裏に空き地があり、住民たちの活動と交流の場として畑を作りたいということだった。現地はゆるやかな斜面で、雑木がところどころ生えている草と石だらけの荒地である。いままでも何日か来ているようであるが、場所は広いのでまだまだ相当かかりそうである。

活動のリーダーは、広島から 1 年近く前から来ている K さんである。これまでと違って、ここではボランティアセンターの人は同行しない。すべてをボランティアに任せている。リーダーの掛け声で作業を始め、リーダーの掛け声で一斉に休憩をとる。前より休憩をとる間隔は短く、30 分ぐらい作業すると 10 分ぐらい休みを取る。水やお茶もここではすべて自前である。

ボランティアは 30 人ぐらいで、体格のいい男もいれば、あまり力のなさそうな女の人や私より年上の年寄りもいる。それぞれが自分の方法とペースで作業を進めていく。力のある者は、地面に剣スコップ突き刺し、スコップの肩を足で踏んで掘り起し、草と石を取り除いて適当にまとめる。力のない人は、その草や石を集めて、空き地の一角に設けた置き場に片づける。

お昼の休憩は、12 時から 1 時までで、午後 3 時に現地作業を終了し、ボランティアセンターに戻る。使った道具を水洗いして倉庫に戻し、たいてい 4 時前にはその日の活動は終了する。

作業で一緒になった K さんが、いい湯があると教えてくれたので一緒に行った。ボランティアセンターから 20 分ぐらいの山を上ったところにある霊泉である。日帰り温泉に見えるが、あえて霊泉とうたうところをみると温泉ではないらしい。でも、昼間からゆったりと大きな湯船につかると実に気

持ちがいい。

5月11日(金)、昨日に続いてモピア仮設住宅に行った。昼の休憩時間に、山のとっぺんにある展望台に行った。そこからは、陸前高田の街が一望できる。今は仮設住宅の事務局で働いている元オートキャンプ場の所長さんは、震災の当日、ここから陸前高田の街が津波に飲み込まれている様子をまざまざと見ていたそうである。テレビ映像だけでも見るに堪えないが、眼前でそれを見ていた時の気持ちはどれほどのものだろうか。言葉にならない。

作業の後は、また玉の湯へ行った。1人500円だが、ボランティアは300円にしてくれる。300円にしてくれるなら毎日来てもいい。晩御飯、今日はKさんが鍋を作ってくれるという。作業で一緒になったFさんも入って3人で一緒に食べることにした。といっても、私は買い物と一緒にいっただけで、あとはすべてKさんとFさんがやってくれた。鍋は、肉と野菜をふんだんに入れたチャンコ鍋で美味しかった。いつもコンビニ弁当ばかりだったので、久しぶりに充実した食事だった。

5月12日(土)、Kさんに誘われ、Fさんとともに今日は作業を休んで、オランダフェスティバルに行った。市民レベルでオランダと交流する催しで、チューリップ畑の隣にテントを張り、無料でオランダの食べ物をふるまってくれた。ひととき大きなテントには、オランダの子供たちの絵や写真が飾られていてちょっとした展覧会だった。イベントがありオランダ人が挨拶した。言っていることはよく聞こえなかったが、風が強く寒いぐらいなのに半ズボンなので驚いた。挨拶に続き、バイオリンとチェロの演奏会も行われた。

帰りに、「りくカフェ」に寄った。震災後、復興のための交流の場として、素材としての木を活かし建築されたカフェで、ちょっとしゃれている。コーヒーを飲み評判のマフィンを食べっているとカンパ箱が目に入った。カンパと込みで千円を渡した。夜は、Kさんがカレーを作ってくれた。

5月13日(日)、朝、ボランティアセンターに行くと大型バスが5、6台止まっていた。日曜日なので、ボランティア団体がたくさん来ているようだった。聞いた話によれば、一番多いときは20台ぐらいきていて、駐車場に入りきれず、近くの空き地で待機していたらしい。私は、親しくなったYさんが、今日は通常の募集とは別に、1人で以前から頼まれている個人宅へ行くというので頼んで連れて行ってもらった。少し高台にある鉄筋コンクリート造り2階建てで、1階部分は完全に津波に飲み込まれた個人住宅である。依頼主の都合で日曜日だけの依頼で、Yさんは先週も来ていて、今日の作業を約束していた。作業内容は、津波で錆だらけになったテラスや階段の手すりの錆を落としてペンキを塗ることだった。依頼主は話好きで、家を訪ねるや2階の居間に案内され、お茶やお菓子をふるまわれた。お茶を飲んでいると分厚い写真アルバムを出してきて、何かないと見ると今までボランティアに来た人たちの写真だった。しばらく、被災した時やボランティアのひとたちの話を聞いたあとで、私たちの写真も撮ってくれた。その日の夕食は、Kさんが焼肉を支度してくれた。

5月14日(月)~16日(水)、月曜日と火曜日はボランティアセンターが休みなので、前から行きたかったところへ出かけることにした。2泊3日で、道の駅に泊まりながら遠野、花巻、平泉を回った。

16日夕方、住田基地に戻ると、玄関前に黄色い移動販売車が止まっている。「なにっこれ」、Yさんに聞くと、大手企業のクボタが新入職員の研修の一環としてボランティア活動にきていて、その食事を請け負ったケータリング会社の車らしい。

5月17日(木)、空き地のがれき撤去の作業に参加した。住田基地で一緒になったクボタの研修集団も同じ場所となったが、作業範囲や行動は全く別だった。住田基地に止まっていた移動販売車も一緒についてきていた。さすが、大企業やるのが違うね。さて晩ご飯、頼みのKさんは活動を終えて帰ってしまっていたので自分で作るしかない。面倒なので簡単にレトルトのごはんとカレーですませた。

5月18日(金)、住田基地には、「チーム住田」というグループが存在する。長期にわたって住田基地に住み、ボランティアセンターを通して、7、8人のチームだけで活動をしている。毎朝ボランティアセンターには行くが、朝のミーティングが終わると、住田チームはすぐに出発する。Fさんに聞くと最近、津波で流された牡蠣のイカダ作りをしているらしい。面白そうだが、ベテランぞろいで声をかけにくい。チームのメンバーが出発の準備をしているときに、思い切って声をかけると、「いいんじゃないの」と、車に乗せてくれた。

場所は、被災した市街地の東にある小さな港で、丸太を組み合わせてイカダを作る作業である。直径20センチくらいの丸太で縦10メートル横5メートルくらいのイカダを作る。丸太を縦横に配置して組み合わせ、重なったところを電気ドリルで穴を開け、ボルトを通して締め付ける。丸太の枠組ができれば、ドラム缶くらいの発泡スチロールスチロールを四隅に2個ずつ全部で8個取り付けると完成である。7人で1日に3個作った。

5月19日(土)、今日もチーム住田でイカダ作りをした。港に着くと依頼主の漁師さんがいて、港でとればかりという天然の牡蠣をたべさせてくれた。なにもつけずそのまま食べたが、新鮮で少し塩味がついていて美味しかった。昨日は、ボルトにナットを付けたり、丸太に通したボルトをナットで締め付けるなど手作業ばかりだったが、今日はちょっと昇格して、電気ドリルで丸太に穴を開けたり、ボルト締めが終わり飛び出しているボルトをサンダーで切る電動器具の作業も担当した。一日中カンカン照りで暑く、持って行ったお茶を途中で飲み切ってしまうとちょっと焦った。

5月20日(日)、前から決まっていた用事があり帰らないといけなかったので、高速道路で岡崎に戻った。活動仲間に教えてもらって、ボランティアセンターで活動証明をもらい、陸前高田市役所で手続きをしたので高速代は無料となった。一か月あまりのボランティアと東北観光の旅だったが、被災地の実情が良く分かったし、ボランティアもできたし、いろいろな人にも出会えて印象深いいい旅であった。(次号に続く)

---

(なかの あきら:愛知県岡崎市再任用職員。2012年3月に36年間勤めた岡崎市役所を定年退職。  
2013年4月より宮城県亘理町に派遣。現在、亘理町上下水道課で下水道事業に従事)